

METTの歴史と今後について

METT管弦楽団

代表委員 三田康久(23理乙)

遂に同窓会は解散の時を迎え、本誌も最終号発行のやむなきに至った。東高の音楽活動を引き継ぐ「METT」については、これまで松本義明(21理乙)氏(管弦楽団のヴィオラ奏者、同窓会担当の特任役員)が本誌「掲示板」欄に毎回の演奏会を予告掲載してこられたが、今回最終号においてはMETTの概要や話題、コメント等載せたいとの編集子の意向もあり、私(三田・23理乙、管弦楽団代表委員)が記事を書くよう松本氏から話が あったので筆を執った次第である。

○METTと「音楽同好会」

METTには管弦楽団(以下オケと略する)と合唱団(同コーラス)の二グループがあつて、毎年秋の定期演奏会を両団共催で実施し好評を得ているが、それ以外は通常別行動をとっており、オケは毎春独自にスプリング・コンサートを開催している。なお両団にまた

がって「東高音楽同好会」と称する支援団体があり、広く同窓会員各位から理解と資金を得て我々を長年支援してくれたが、会員の高齢化と減少に伴つてつい先頃自然消滅となつた。初代会長は故篠島秀雄(1文甲)氏で、2代目・故出淵国保(1文甲)氏、そのあと発起人の一人だつた故横山正克(4文乙)氏が3代目を引き継ぎ、その没後に石黒隆(17理乙)氏が4代目会長となつて、支援の輪を更に拡げてくれた。その努力と功績に対し感謝の気持ちを表明したい。横山、石黒両氏共にMETTオケの代表としても活躍されたが、横山氏はヴァイオリン奏者、石黒氏(現在はオケ名誉代表)は初めはクラリネットを吹き、今でもオケのレギュラー・メンバーとしてオーボエ、コール・アングレー(イングリッシュ・ホルン)を担当しておられるタフなプレイヤーである。なお今回、原稿作成がオケに在籍する私に回つてきたので、その内容はオケに偏ることになるかも知れないが、何卒ご容赦願いたい。

○METTは存続する

昨年オケ・コーラス協議の結果、同窓会解散後もMETTは存続し、演奏活動を続けていくこととなつた。その理由は、①METT

は実体のある音楽団体として存続可能、②特に秋の定演はオケ・コーラスが兄弟団体として共催。会場確保、聴衆動員の面でも成果を上げていく。③定演の目玉として、曲目最後に同窓会OB聴衆も舞台上つて東高校歌を全員合唱するが、これが楽しみで毎回来られるOBも多い。中には昨年7月亡くなられた故大石松三(5理甲)氏のように、ご高齢にもかかわらず毎回欠かさずご来聴くださった先輩もおられたことは私共の感激の至りであり、演奏にも励みが与えられたものであつた。

○東高の音楽活動の始まり

元来は東高創設期、大正11年の尋常科開設時に前記の故出淵国保氏、故朝比奈隆(1文乙)氏らによるハモニカ・バンドに始まり、大正14年の高等科開設に伴つてこれが器楽合奏に進化。昭和3年には東高開校記念式典で早くもオケ演奏が行なわれたというのが故横山氏(前記)の話による有史以前のMETTの姿である。これと並行してコーラス活動も盛んとなり、昭和2年の第1回日本合唱コンクールで入賞を果している。METTの原型はハモニカ。その始祖の一人であつた朝比奈氏が後に関西交響楽団(現・大阪フィル)を創設して、日本の交響楽団の草分けの一つと

なつたことはよく知られている。

○METTの名付け観

これが誰かについて、私の記憶では、オケがまだ中野のサンプラザを練習場としていた頃、休憩時に故加藤正夫（9理乙）氏（ヴァイオリン）が Music Ensemble of Toko & Todai-fuzoku という名称を我々に説明してくれたことから、加藤氏が深く関わっておられたと思われる。なお同氏はベルリン・フィルのメンバーに友人が多く、同団来日公演の際には彼らが暇を作って楽器持参で加藤邸に集い、「お遊び演奏」に興じたとのことである。

○練習場の確保

これにはどのオケも頭を痛めているが、我々は或る時期から長年にわたって素晴らしい場所を利用できた。団友の元・オーボエ奏者、水上萬里夫（25回）氏の尽力によるものであったが、その蔭には故杉浦敏介（4文甲）氏のご理解があったと感謝している。

○指導者について

初期の頃の演奏会では指揮も東高OBが担当した。昭和53年、「第1回」と銘打って再開された定演では、指揮・故佐藤京三（6文丙）氏と石黒氏（前記）。佐藤氏はピアノ協奏曲ピアノ・ソロを、また石黒氏はクラリネット

五重奏曲ではクラ・パートを担当されるという活躍ぶり。この時期のヴァイオリン・トッブは名手、高見頼郎（21理甲）氏で、以降ずっと当オケのコンサート・マスターを務められた。第5回定演（昭和57年）以降は佐藤氏のほかに井上一美（25回）氏も指揮者として加わり、レパートリーの多様化と演奏技術の向上に貢献された。現在は新進気鋭のプロ指揮者・久世武志氏に正指揮者を委嘱して、その指揮を4年前から受けている。

○METTの構成

「神話時代」のようなハモニカ・バンドの音出し以来90年余。オケの構成は当然ながら年々東高色が薄れて、今は現役メンバー63名中、東高OBは僅か数名となった。構成を出身別に見ると、①東高OB、②東大オケOB、③東大附属校OB、④慶応ワグネルOB、⑤早稲田オケOB、⑥旧・長銀オケOB、⑦JRオケ・グルーブ、その他以上のメンバーの子女、夫人、友人など多数。これに他のオケ・メンバーや元プロ・セミプロの演奏家など約20名がエクストラとして応援参加し、総勢80名のフル編成交響楽団を構成する。人員の確保も仲々大変である。参考までにコーラスの構成は平成23年現在で男声22名、女声20名の計42名。出身

別では東高12、東大附属校30と、附属校の貢献度が非常に高い様子がうかがわれる。コーラスの知久 徳（23理甲）団長、畑野逸典（23理甲）指揮者等のデータから。なお東高OBからはプロの演奏家も輩出しており、ヴァイオリンの三川 晋（19理甲）氏、ホルンの安藤榮作（22理乙）氏などがその例である。

○オケ規約の制定

組織近代化の一環として、石黒氏が代表時代の平成16年に団の「規約」が制定された。この規約草案の起草に当っては、ヴィオラ奏者の芝 祐邦（20理甲）氏が中心となつて力を尽くされたが、複雑怪奇なオケという組織体の運営（経営と管理）に一つの行動規準が与えられたことの意義は大きい。

○METTの今後

実質90年余の歴史を背負ったMETTは、管弦楽団・合唱団共に「今後も存続」の途を選んだ。これまで団員として直接関わってこられた多くの先輩・団友諸氏のご努力に敬意を表すると共に、聴衆として支えて下さった同窓生その他ファンの方々のご支援に心から感謝している。来聴者を分析してみると、OB自体が総体で減員しつつある中で、今でも新しいOBファンが増えていることは誠に有難い。

一般のファンも勿論その幅を拡げている。秋の定演では「来聴者六〇〇人」を合い言葉に、METTの足許を一段と固めていきたいと願っている。